

ゆるやかなつながりが 守るもの

～沖島と人との関わりから考える～

カバーガイド

《御礼》 ブックレットをまとめるにあたり、多くの人にご協力いただきました。
あらためまして、御礼申し上げます。

インタビューに登場いただいた皆さん(順不同・敬称略)

奥村良平、奥村あいこ、本多有美子、小川文子、富田雅美、久田清、小川泰治、塚本千翔、川瀬明日望、橋本花菜子、森田幸光、西居英治、櫻木みわ、上田洋平、久保瑞季、奥村ひとみ、宮崎瑛圭

ケアしあうミュージアムWEBフォーラム「沖島」公開中
この事業を総括するフォーラムを沖島で開催し、
その様子をYouTubeにて配信しています。ぜひご覧ください。
<https://youtu.be/ju8V3BiwzI4>



〈登壇者〉 田口真太郎、奥村繁、上田洋平、奥村ひとみ、富田雅美、土井忠史、東有希

〈主催〉 ケアしあうミュージアム事業実行委員会(構成団体は以下)

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(社会福祉法人グロー[GLOW])、国立民族学博物館人類基礎理論研究部、しが外国籍住民支援ネットワーク、社会福祉法人近江八幡市社会福祉協議会(地域福祉課)、一般社団法人近江八幡観光物産協会、滋賀県(文化スポーツ部文化芸術振興課/美の魅力発信推進室)、滋賀県(健康医療福祉部障害福祉課)、近江八幡市(総合政策部文化振興課)

〈助成〉 文化庁 令和5年度 Innovate MUSEUM事業



ゆるやかなつながりが守るもの
～沖島と人との関わりから考える～



2024年2月29日発行

〈制作・発行〉 ケアしあうミュージアム事業実行委員会

〈発行責任者〉 牛谷 正人(ケアしあうミュージアム事業実行委員会 実行委員長)

〈執筆〉 田口真太郎(成安造形大学)、事務局

〈写真〉 茶谷力、上田洋平、奥村ひとみ、久保瑞季、離島振興推進協議会、
富田雅美、川瀬明日望、橋本花菜子、宮崎瑛圭、竹岡寛文、事務局

〈事務局〉 西野裕貴、横井悠、赤澤誉四郎

〈デザイン〉 株式会社タケコマイ 竹岡寛文

〈事務局〉 社会福祉法人グロー(GLOW) 法人事務局地域共生部

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2

TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228

このブックレットを手にとってくれた「あなた」へ

「沖島」は日本で唯一、淡水湖に浮かぶ有人島。時が止まったような空気に包まれ、すれ違う島の人たちは穏やかな笑顔であいさつしてくれます。滋賀県近江八幡市の堀切港から船で約10分、気楽に訪れることができる離島です。

このブックレットを手にとった人は、こう思うかもしれません。

「これは、何?ガイドブック?研究書?」

ガイドブックを期待した人は、観光スポットがよくわからなくて、拍子抜けするかも。でも、じっくり読むと、沖島に暮らす人の顔が浮かんでくるような、沖島の魅力が詰め込まれています。

2023年、沖島と同じ近江八幡市にある美術館「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」では、沖島に関わる人たちの文化や生活、活動を島への想いについてヒアリングしました。このブックレットはそれを記録としてまとめ、発信することで地域社会に還元することを目指しています*。

多くの人を惹き付ける沖島ですが、800人を超えていた人口は現在230人にまで減り、超高齢化が進んでいます。「漁師の後継者問題」「空き家問題」など課題も多く抱えています。一方、沖島の未来に光を照らす変化も生まれています。若者が移住してきたり、新しい漁師の担い手が誕生したり、観光客も増えました。「大学生」を触媒とした「他出子」の変化は、このブックレットを読んで感じていただきたいポイントの1つです。

なぜか、たくさんの人の「気になる」が集まってくる不思議な島。「気になる」が、ゆるやかな関係を生み、沖島を優しく包み込んでいます。このブックレットを読んで、あなたが「沖島、気になるな」と思ったら、その時から、あなたも沖島を取り巻く関係者の一人です。

「沖島のゆるやかなつながりが守るもの」

ヒアリングチーム一同

※令和5年度文化庁 Innovate MUSEUM事業「ケアしあうミュージアム」の一環で実施しました。実施にあたり、社会福祉法人グロー法人事務局地域共生部と成安造形大学助教授の田口真太郎さん、café&gallery汀の精オーナーの奥村ひとみさんを中心に調査チームを結成して、インタビュー、分析、執筆を行い、ブックレットとして編集しました。

沖島の近代史

- 1805(文化2)年 家数43、人口194人。田畑が必要となり、対岸の小田ヶ浜、宮ヶ浜を開墾。
- 1893(明治26)年 島村立沖島尋常小学校、開校。
- 1903(明治36)年 沖島水産会が沖島漁業組合として組織される。
- 1915(大正4)年 石材販売組合が組織される。
(1923年、石材価格が最高になる)
- 1947(昭和22)年 関西配電により、水中ケーブルで送電が開始される。
島村立沖島中学校が併設され、
島村立沖島小学校と改称。
- 1951(昭和26)年 島村を廃し、蒲生郡近江八幡町に編入。
- 1955(昭和30)年 沖島153世帯、人口808人。以降は減少となる。
- 1970(昭和45)年 石材販売組合、解散。
- 1972(昭和47)年 琵琶湖総合開発計画、正式決定。
- 1973(昭和48)年 沖島新漁港着工。琵琶湖総合開発により、
近代的な漁港の造成に。
- 1991(平成3)年 琵琶湖総合開発事業、すべての工事が完了。
- 1992(平成4)年 沖島小学校創立100周年記念式典。
老人憩いの家、開所。
- 1999(平成11)年 沖島町営定期船運航開始(4月1日)。
- 2001(平成13)年 「沖島21世紀夢プラン」始動、実行委員会開催。
- 2012(平成24)年 沖島が離島振興対策実施地域に追加指定され、
翌年、沖島町離島振興推進協議会を立ち上げる。
- 2018(平成30)年 沖島初の地域おこし協力隊(山角美佳子さん)着任。
- 2019(平成31)年 「沖島民泊湖心koko」オープン。
- 2022(令和4)年 沖島の人口が221人となる(男性99人、女性122人)。

(参考)西居正吉氏制作年表より



日本で唯一の淡水湖に浮かぶ有人島

沖島 Okishima

琵琶湖
Lake Biwa

沖島の暮らしと文化を象徴するキーワード10

インタビューのなかでも頻りに登場する10のキーワードについてまとめて解説。これを知っておけばあなたも沖島ツウ!

1 沖島の左義長祭り
おきしまのさきちようまつり

江戸時代末期に始まった伝統行事。毎年1月初旬に、しめ縄などのお正月飾りを燃やす火祭り行事に加えて、成人の仲間入りすることを祝う「元服」の行事も兼ねて行われるのが沖島の特徴。今では、五穀豊穡、大漁、無病息災、勉強祈願など島民挙げての祭りとなっている。

2 宮世話
みやせわ

厄年の男性40歳10名が、厄払いの意味も込めて1年間神社に奉仕すること。

3 他出者&他出子
たしゅつしゃ&たしゅつし

沖島を離れて暮らす沖島出身者のなかで、親世代が沖島に暮らしていなければ他出者、今でも沖島に親世代が暮らす家があれば他出子という。

4 沖島町離島振興推進協議会
おきしままちりとうしんこう
すいしんきょうぎかい

通称、協議会。2013年、離島振興法に基づき発足。淡水湖の有人島としては唯一。自治会、沖島漁業協同組合、湖島婦貴の会、女性会、老人クラブなどの団体と県や市で構成され、沖島の振興に努める。

5 定期船(通船)
ていきせん(つうせん)

1999年、沖島港と対岸の堀切港を結ぶ定期連絡船として就航。それまで、自家用船のみだった交通インフラが劇的に改善された。所要時間は片道約10分。現在は1日10往復ほど運航され、観光客の増加にも大きく寄与している。

6 沖島漁業協同組合
おきしまぎょうぎょうどうくみあい

前身は、1903(明治36)年に組織された沖島水産会。現在は、正組合員70名に加えて、後継者育成事業として長期研修を終えた30代の準組合員52名が加わり、深刻な後継者不足問題と向き合っている。主にアユやワカサギ、スズエビ漁などを営み、漁獲量は琵琶湖漁業全体の約4割。

7 みんな親戚
みんなしんせき

1159年、保元・平治の乱で敗れた源氏の武士(小川、北、茶谷、中村、西居、久田、南の7姓)が沖島に漂着して住み着いた。今もこの姓の家が多く、実際に祖先をたどると親戚関係にある家が多いという。

8 地域おこし協力隊
ちいきおこしきょうりょくたい

都市部から全国の過疎地域などへの移住を促進する総務省の事業。地域の魅力発信など、地域おこし活動の支援を行いながら、活動者の定住・定着を図る取り組み。隊員は各自自治体。沖島の場合は近江八幡市から委託を受けて、任期は最大で3年。

9 琵琶湖総合開発事業
びわこそうこうかいはつぎぎょう

琵琶湖の自然環境保全を目的に、地域開発と水資源開発を一体的に進めた日本初の事業。治水や利水対策として湖岸堤を設けたり川幅を広げたりした結果、琵琶湖の環境に悪影響を与えたといわれる。20年をかけ、1991年に全工事が完了。

10 アイランダー
アイランドー

全国の離島関係者が年に一度東京に集い、観光PRや特産品販売を行うイベント。国土交通省などが主催し、関係者同士で島の課題を共有したり、移住希望者の相談窓口を設けたりしている。

「またもんできます」小さな約束を果たし続ける『よそ者』の祈り

久保 瑞季



2024年1月8日―沖島の左義長*を眺めている。

大学1年生から沖島に関わりだして、何度目の左義長だろうか。初めて見た時と変わらず、火は勢い良く燃え盛り、天に向かつて大きな火柱を立てている。年始めの祝い事である左義長は、15歳の青年にとっては元服の儀式、島のオナゴシ(女衆)にとっては裁縫の上達祈願、漁師にとっては今年の豊漁祈願とその方角を占う行事など、島民にとって多くの意味をもって行われる。ただ、どのような立場にしろ、その年の無事を祈ることはいつの時代も変わらないのかもしれない。もし、私が関わり始めた時から変わった点があるとしたら、火を囲む人たちの多様さだと思う。

8年前の2016年に、滋賀県立大学の 上田洋平先生に連れられ、初めて左義長に参加した。この時は、左義長を彩る紙垂を切る「紙切り」を手伝った。これが私にとって初めてのボランティア経験だった。当時、この準備作業を担っていたのは、島の自治会の役員だけで、宮世話*もいなかったように思う。役員のおっちゃんたちは、孫と子どもの間くらいの年齢の私に親切に紙の切り方を教えてくれた。約6,000枚の赤、紺、黄、緑、白の色とりどりの紙を木枠に沿って切っていく。とても根気のいる作業だったが「来てくれたから、はよ終わったわー」と手伝いに来たことを感謝された。もちろん、手伝い始めてまもない私が力になるはずもなく、いつもと違う若い人がいるから、おっちゃんの「作業がはかどった」というのが事実だった。この時「若者がいると作業も進むし、みんな笑顔やなあ」と初めて若者がそこに「いる」ことで生まれる変化を感じた。

そこからの私と島の関わりは、上田先生の授業から始まり、祭りのお手伝いなどのボランティアを行う学生団体「座・沖島」の立ち上げ、卒業論文での他出者*の調査、社会人になってからは毎月第3日曜日、浜大津駅前で開催されている「浜大津こだわり朝市」に出店する沖島漁師の会の手伝いや湖魚関連コラボイベント等の実施など、約9年にわたる。2017〜2019年の2年間は実際に移住し、島から大学へ通学していた。沖島に移住していた頃、特に離島振興推進協議会(以降、協議会)の方々、隣に住む「島父・島母」と漁師のご夫妻(北村重俊さん、すえみさん)にあらゆる面で支えられていた。お金もなく自炊が苦手な私を毎日のように食卓に招いてくれたり、クーラーがない部屋だったので夏の暑い晩には泊めてくれたりした。このように学生である私を温かく受け入れてくださった方がいる一方で、島民の属性によっては、関係を築けていなかった方も多かったと思う。島の窓口と遠い方とは頻繁には話すことができなかったのだ。

それを裏付ける訳ではないが、移住中の印象的な出来事の一つとして、2018年7月8日に開催された「沖島の未来を考える会」七夕短冊に願いを込めて〜というイベントがある。協議会が主催で開催し、島内外から集まった人たちが、沖島の未来や願いを七夕の短冊にしたため、それを基に感想を言い合うというものだ。この時、一つの短冊に「島はよそ者に慣れてきた」と書かれていたことを思い出す。「受け入れる」ではなく「慣れてきた」という言葉に、祭りを手伝っていた学生等「よそ者」による島民の変化をうれしく思う気持ちと、まだまだこれからだという悔しさが同時に湧き起こった。

だが、2024年の今はどうだろう。左義長では「紙切り」よりも大変な竹や笹を切る作業を、地域おこし協力隊*などの移住者や他出者、学生も手伝ったと聞いている。高齢化が進む自治会の役員でこなしていた作業をいまやよそ者も共に担うようになった。初めて参加した2016年とは違い、左義長の火柱を囲んでいた面々は、移住者、他出者、学生、観光客など、島民以外のよそ者も多く存在している。この光景は数年前では考えられなかったと思う。沖島はよそ者に「慣れてきた」から「当たり前」になりつつあるかもしれない。それは島民に認めてもらうために、溶け込もうとする移住者の「頑張り(努力)と私が言うにはおこがましいので」はもちろん、コロナ禍を経ても関わり続ける学生、故郷を想って多忙でも帰省してお手伝いをする他出者など、島を支え続けるよそ者の存在が大きいと思う。

しかし、それだけではない。よそ者も島民の受け入れがないと関わることは難しい。冒頭の「紙切り」での経験のように、よそ者に触発された島民自身もゆっくりと変化し、受け入れられるようになってきているのではと思う。そして、その受け入れがよそ者にとって、地域の大きな魅力となり、さらに新たなよそ者を惹き付ける。受け入れて、惹き付けられ、島民も少しずつ変化して受け入れ、さらにそれがまた違うよそ者を呼んでくる。その好循環が少しずつ広がりはじめ、当たり前前のようになってきたのではないか。

さて、話は戻って今年の左義長を眺めている時、島の知恵袋・西居正吉さんが私に話しかけてくれた。「あの焼いた竹をな、軒下に入れたら蛇がこうへんくなるねん。ほら竹は細長いやろ。お前(蛇)もこうなるぞ(焼かれる)ってことや」。左義長には何度も参加しているが初耳の話だった。なるほど、焼かれた竹から蛇を連想するのか。きつとこれを最初に願った人は、相当蛇に悩まされていたのかもしれない。そう思うと左義長も正月に行われる節目の行事だったものが、さまざまな立場の方が関わるようになり、元服の儀式や裁縫の上達祈願などのたくさん意味を持つ祭りになったのか。ならば、これからよそ者は左義長にどんな意味を見出し、どんなことを願うのだろうか。そうして、また左義長は島民やよそ者にとって、なくてはならない祭りになっていくのだろうか。

地域も同じかもしれない。たくさんの関係する者が、その地域に新たな意味や価値を見出し、多くの者にとってなくてはならない地域になっていく。人が人を呼び、関わり合い、その人たちが新たな意味を見出し、その地域はかけがえのないものになる。そうやってずっと地域というものは続いていくのかもしれない。そんな輪が生まれ続けることこそが鍵になっていくのだろうか。

最後に、最近惜しまれることがあった。2023年の年末に奥村良平さんが亡くなられたのだ。移住していた時は、自宅に招いて奥村さん一家とごはんを一緒にしたり、学業や島の活動のことなどたくさん相談に乗ってくだった。社会人になったばかりで不安だった時には「パワーやー」と喝を入れていただいたり、いつも温かく励ましていただいた。私にとって本当に貴重な存在だった。島のお世話になった人が一人また一人と旅立っていられる。いったい私に何ができるだろうか。こういった時いつも沖島の母こと、北村すえみさんの言葉を思い出す。

「もらった人に恩は返せない。だから違う人に恩送りをするんやで」

恩送りは何からしたらいいだろう。まずは「またもんでこい(もどってこい)」という島民の声かけに対して「またもんできます」というよそ者の小さな約束を果たすことから始まるのではないか。だから私はこれからも島にもんで続ける。私はただこの島に暮らす人とその人たちの望む暮らしが無事できてほしいだけ。そんな祈りをのせて、左義長の火柱とそれを囲む人たちを眺めていた。